マンション戦記

高来加津佐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
マンション戦記

【Ｎコード】
Ｎ９６５６Ｓ

【作者名】
高来加津佐

【あらすじ】
マンションとともに、戦国時代にタイムスリップした住人たちは、関東の覇権を争う北条氏綱と上杉朝興の抗争に巻き込まれていく。彼らは、このサバイバルの時代を、生き抜くことができるのか。ＳＦ歴史ファンタジーです、ぜひ、一読下さい。

戦国前夜１

　１２月２３日、天皇誕生日の今日、リバーサイド登戸ではクリスマスパーティーが開かれていた。場所はA棟のエントランスで、玄関を入って直ぐの左手にあった。右手には管理室があり、昼は管理人、夜は警備員が、住人の安寧を２４時間体制で守っていた。
　このパーティーは、A棟の住人有志で開かれていたため、参加者はA棟の住人に限られていた。１階の４分の１を占拠するエントランスの一角に、料理や飲み物を互いに持ち寄り、夕方の６時に始まった。
　宴もたけなわの頃、警備員の綾部が、管理室の受付から、その光景をうらやましそうに眺めていた。すると、この棟の3階の住人で、マンションの理事でもある、野田元がこちらに向かって手招きをしている。坊主頭に、揉み上げから顎にかけて髭を蓄えた、３６歳独身の男が（飲みに来い）と誘っている。
　しかし綾部は、手でバツを作って、心ならずも彼の誘いを断った。すると、野田が、ツカツカと靴を鳴らしながら近付いて来た。
「おめぇ、何遠慮してんだよ」
そう言って、受付窓口の棚に片肘をついて、綾部に酒臭い息を吹きかけた。
「いやぁ、やっぱ勤務中はまずいですよ」
　綾部は少し仰け反って答えた。
「大丈夫だよ、ちょっと位。顔出せよ」
「いやぁ～」
「いいか、これは理事の命令だ」
　この一言で、すべてが解決した。理事の命令という事で、勤務中に酒を飲むという、大義名分が立ったのだ。
　このマンションは、小田急線の向ケ丘遊園駅より生田方面へ歩いて１０分、二ヶ領用水沿いに建っていた。AからDの４棟から成り、

総戸数225戸の大所帯で、その内24戸がA棟にあった。
「こいつ、警備員の分際で、酒を飲ませろって言うから連れて来たよ」
野田が得意の毒舌で、綾部を、盛り上がっている会話の中に導いた。綾部は、彼自身も所属する、歴史愛好会とその家族のいる処へ連れてこられた。歴史愛好会とは言っても、名前の響きほど大層な会ではない。要は、自然にできた飲み仲間が、家族の干渉を受けずに大っぴらに飲みに行くための、口実の会である。
「大将が無理やり連れて来たんでしょう」
大学で准教授をしている45歳の下里秀康が、前髪を掻き上げながら言った。大学で教え子だった、20歳年下の妻、まりと暮らしている。
「今夜は無礼講ですから、どうぞ」
そう言って、小太りして銀縁眼鏡の田中和也が、紙コップにビールを注いで持ってきてくれた。彼は、一つ年上の妻、美砂との二人暮らしである。綾部は、この田中和也とは同じ28歳という事もあって、歴史愛好会のメンバーの中でも特に親しかった。
「綾部君、たまには彼女と、うちのホテルに来て下さいよ」
西新宿の高層ホテルに勤務している橘聡が、ホテルの最上階にあるレストランの割引券を手渡した。この橘も歴史愛好会のメンバーで、歳は33、妻の縁と3歳になる娘の陽菜との3人家族である。
「ダメダメ橘ちゃん。この男、彼女いない歴50年だから」
そこにいた人々から、一世に笑いが起こった。それと同時に、綾部の顔が赤く染まった。
「ワッハハハッ」
その時、その笑い声をかき消すほどの高笑いが、エントランスに響き渡った。人々は、反射的に窓際の方に目をやった。そこでは、3人の若者が、休憩するために並べてあった椅子を占領してふざけ合っている。髪には金や紫のメッシュを入れ、ズボンをずり下げて履き、周囲に不快感を撒き散らしていた。

　この3人の若者は、勤務先のキャバクラが借り上げた2階の部屋に住んでいた。歳は3人とも20歳前後で、年長の吉田という男がリーダー格のようである。この時間にマンションに居るという事は、どうやら今日は公休のようだ。

（また、あいつ等か）

　綾部はそう思った、と同時に胃が痛みだした。なぜなら、彼らは、このマンションの問題児なのだ。今までにも、騒音やゴミを供用部に放置するなどの迷惑行為を、何度となく繰り返してきた。その度に、苦情の連絡を受けた綾部は彼らの部屋へ注意をしに行くのだが、何時もふて腐れたり茶かしたりして、素直に言う事を聞いてくれなかった。

「この前なんかね、ベランダから弓矢みたいなやつ、ボーガンて言うの、あれ打ってたわよ」

「えっ、人に向けて」

「カラスに向かって」

「あぁそう、でも、それだって怖いわよね」

　周りにいる人々は、口々に彼らの悪評をささやき合った。

　この場合、当然、警備員が彼らに自重を促さなければならない。綾部もその事は十二分に分かっていた。ただ、注意をして、何時ものように絡まれたり茶化されたりしたら、公衆の面前で恥をかく事になる。そう思った彼は、不本意ながら自からが自重することにした。

その時、一人の老人が、ゆらゆらと歩いて来た。
「何しに来たんだよ爺さん、部屋で大人しくくたばってろよ」
野田がうんざりした表情をして、祖父に毒ずいた。彼の祖父、巌は、認知症の進行とともに徘徊を繰り返し、度々、周りの人々に迷惑をかけていた。元や、彼の母親は、その度に近所の人々や警察に、頭を下げて回らねばならなかった。
しかし、巌は、孫の言葉には耳を貸さず、若者が騒いでいる窓際まで歩いて行き、そこで立ち止まった。歯は抜け落ち、顔はシミとしわだらけ、側頭部にわずかに残った白髪は方向が定まっておらず、といった、いかにも老いさらばえた巌の姿を見て、吉田たちは指をさして大笑いした。
しかし、巌は、その笑い声も意に介さず、雷鳴とどろく暗天をじっと見つめている。若者たちは、しばらくは巌の立ち姿を真似してみたり、顔に手をかざして視線を遮ってみたりして茶化していた。ただ、巌が何の反応も示さないため詰らなくなったらしく、そそくさとパーティー会場を後にした。
「爺さんも、人の役に立つことがあるんだなぁ」
野田が、厄介者を追い払った巌の傍に来て、照れくさそうに笑った。巌は、まだ空を見ている。
「無欲の勝利ですね」
田中が、誇らしげに言った。
その時、外の景色が白く浮かび上がったかと思うと、鼓膜が震えるほどの雷鳴が轟いた。
「そろそろ、降ってきますかね」
下里も、巌と同じように暗天を見つめた。
「勝ちゃんが居なくなったのも、こんな日じゃったな」
突然、巌がしゃべりだした。

「じゃが、もうすぐ会える。懐かしいのう、何年ぶりかのう」
巌の目には、涙が光っている。
そこにいた人々は、お互いに顔を見合わせた。そして、一斉に元の方を見た。
「いやぁ、また爺さんの昔話が始まったよ」
「と言いますと」
下里が聞いた。
「いやね、このマンションが建つ前、A棟の敷地には俺の家とその勝ちゃんの家があったんですよ。猪蔵勝男って言ったかな。その人と内の爺さんは同級生で仲が良かったらしいんですけど、終戦の年のある雷雨の日に、その勝ちゃんが忽然と姿を消したらしいんですよ。当時この辺じゃ、神隠しにあったって大騒ぎになったらしいですけどね」
「それで、見つからなかったんですか」
「ですね。で、最近、その勝ちゃんの話ばっかするように会っちゃって。しかも、現実と妄想の区別が付かないもんだから、一緒に遊んだだの、勝ちゃんが会いに来るだの、訳の分かんないこと言うんですよ」
「そうなんですか」
そう言って、下里をはじめ歴史愛好会の面々は、憐みの眼差しを巌に送った。
ちょうどその時、元の母親の和子が3階から下りてきた。
「何やってんだよお袋、徘徊しないようにちゃんと見とけよ」
息子にそう言われて、和子は周りの人々に頭を下げながら巌の手を引いた。途中、巌は橘ゆかりの前で立ち止まった。そして、母親の傍で手羽先餃子をほおばっている陽菜を見つめた。
「お譲ちゃん、あんたも勝ちゃんの所へ行くのかい」
そう声をかけられた陽菜は、上目使いで巌を見ながら、恐る々母親の後ろに身を隠した。巌の手を引いていた和子が、申し訳なさそうに

「すいませんどうも」
と、縁に頭を下げ
「お譲ちゃん、ごめんね」
と、陽菜に声をかけた。そして、巌の手を強くひいて、無理やり連れて行こうとした。すると、巌は和子の手を振り払って
「お譲ちゃん、何があっても、そうやってお母さんの傍を離れんようにな」
と言って、今までの老いさらばえた姿からは、想像もできないほどの速度で歩き出した。和子は慌ててその後を追いかけた。

巌が去って、落ち着きを取り戻した歴史愛好会の面々は、お互いの紙コップにビールやワインを注ぎ合いながら、今後の活動について語り合った。
「枡型山なんかどうだ、田中」
「直ぐ近くじゃないですか大将。どうせなら、もう少し遠出しましょうよ」
「小机城なんか、いいんじゃないですか」
「おっ、よく知ってるね。さすが歴史博士の綾部くん」
「いやーそうでもないですよ橘さん。あっ、そう言えば小机城って、北条にとってはかなり重要な城だったんですよね、先生」
「そうですね。特に多摩川を挟んで、扇ヶ谷上杉氏と対峙していた頃は重要でしたね。もちろんその時代には、ここの近くにある枡型城や小沢城も、国境の城として重要な位置を占めていたと思いますよ」
「なるほどねぇ」
今の彼らの会話でもわかるとおり、このマンションのある登戸周辺には、後北条氏ゆかりの山城が多数点在していた。しかも、それらの多くは、地元の人々の尽力により整備保存されており、気軽に散策を楽しめるようになっていた。ちなみに、枡型山城跡はこのマンションの南東1キロ、小沢天神山城跡は西方3キロ、小机城跡は南東12キロにある。
「あっ、ちょっとすみません」
下里が、携帯電話が鳴ったので、その場を離れ窓際に移動した。
その時、盛り上がっていた会話が一瞬途切れた。だいぶ酔っていた綾部は、この後の勤務のことを考えて、今できた会話の隙間を利用して
「あっ、すいません、日報を書かないといけないんで、失礼します」

と言って、その場を離れた。
管理室に戻った綾部は、宣言どうり日報を書くため机に座った。しかし、それは睡魔との闘いの始まりであった。
酔って集中力も思考力も低下しているうえに、座ってじっと下を向く姿勢を取ったため、次第に意識が途切れ途切れになってきた。彼は必至で、頬を叩いたり足を抓ったりして、抵抗を試みたがあまり効果がなかった。
　さらに、暖房のきいた部屋とロビーから聞こえてくる適度な雑音が呂翁の枕となり、彼を、邯鄲の夢へと誘っていった。机の右隅に置いてある時計は、７時５０分を指していた。

「おい、綾部、起きろ」

居眠りをしてしまった綾部が目を覚ますと、受付の前に野田が立って睨んでいる。綾部は、思わず立ち上がって直立不動になった。

「3階の村上さん、お前が寝てるの会社にちくってたぞ」

「えっ、本当ですか」

彼は焦った。居眠りが本部に知れれば、統括部長の叱責が待っているだけでなく、下手をすれば首である。

「しょうがない、会社、首になったら、俺っちの居酒屋で働かせてやるよ」

彼は、向ケ丘遊園駅の近くで、居酒屋を経営していた。

綾部も、野田にそう言われて（それも悪くないな）と一瞬、思った。しかし、よくよく考えてみれば、野田が強引にパーティーに誘わなければこんな事にはならなかったのだ。

（何が「俺っちの居酒屋で働かせてやるよ」だよ、強引に誘ったことを誤るのが筋だろう）

そう思うと、急に怒りが込み上げてきた。しかし、その怒りを表に出すわけにはいかない。たとえ、どんなに親しい間柄であっても、綾部と野田の間には、警備員と居住者という、厳然とした格差が存在するのだ。そして、その格差は、消して越えてはならないこの世界の掟なのである。

怒りを飲みこんだ彼は、野田から視線を反らすようにエントランスに目をやった。外は雨が降っている。時折、雷の音が建物を揺らしていた。あれだけ賑やかだったエントランスは静まり返っており、歴史愛好会の面々と数人の住人がのんびりと後片付けをしている。玄関に掛けられている時計の針は、もう8時20分を指している。

「冗談だよ綾部ちゃん。何、マジな顔してんだよ」

野田が豪快に笑った。それを見て、綾部は素直にほっとした。い

や、気が抜けたと言った方が近いかもしてない。そして、野田に対する怒りも、頭の先から抜けて行った。
「すいません、後片付け手伝います」
　その言葉には、野田に対して抱いた負の感情に対する、自責の念が込められていた。
「それより、2階の吉田がまた騒いでるから、苦情が来る前に注意した方がいいぞ」
　耳を澄ますと、2階から音楽が聞こえてくる。（また、年下に茶化されるのか）と思うと、気が重くなてきた。居眠りの件が解決して、ほっとしている所え、また難問が降りかかってきた。綾部は、憂鬱な気持ちを引きずりながら管理室を出た。
「俺も一緒に行こうか」
　事情を知っている野田が、助け船を出した。
「すいません、いいですか」
　綾部は、抵抗を感じながらも、思わず野田の助け船にすがりついた。
　その時、バリバリと天地が裂けるような音がした。そして、その直後に、外の景色が白く浮かび上がったかと思うと、一際大きな雷鳴が轟いた。
　照明が落ち、辺りが真っ暗になった。しかし、すぐに非常灯が点灯して、最低限の明るさは保たれた。
「雷が落ちましたね」
　下里が、天井を指さしながら言った。
「ちょっと、屋上見てきます」
　そう言って、綾部が、管理室の隣にある非常階段に向かおうとした時、外の景色がまた白く浮かび上がった。（また、落雷か）と思った住人たちは、無意識のうちに身構えた。
　しかし、彼らの予想に反し、雷は落ちなかった。外は明るいままで、よく見ると他の棟の住人が、傘も差さずに歩いている。綾部は何気なく、玄関の上に掛けてある時計を見た。

（11時30分？）
不思議に思った彼は、振り向いて、後ろにいた野田に話しかけようとした。ところが、体が全く動かない。指1本動かせない。
不安になった彼は、野田を呼ぼうとしたが、どんなに胸や腹に力を入れても、半開きになった口を空気が出入りするだけで声が出てこない。焦った彼は、呼吸がだんだん速くなってきて、酸欠状態になってきた。苦しくて、胸を掻き毟ろうとするが手が動かない。
その時、突然、地面が揺れ始めた。地震のような小刻みな揺れではなく、まるでブランコに乗っているような振り幅の大きな揺れである。そして、そのゆれのリズムに合わせるように、外の景色が明るくなったり暗くなったりしている。明るくなる度に、今までに見たことのない田園風景が浮かんでは消えていく。
その明と暗の間隔が、次第に短くなってきて、田園風景から昔の土木工事の風景になった。何百人もの褌姿の人々が、鍬を使って地面を掘り下げている。
（もしかして、二ヶ領用水を造っている光景なのか）
過呼吸になって、意識がもうろうとする中で彼はそう思った。しかし、即座に否定した。二ヶ領用水が造られたのは400年前である。タイムスリップでもしない限り、その光景を見ることは不可能である。
（幻覚を見るという事は、かなりヤバい状態だな）
彼はの脳裏に、死の影がちらついた。外の景色は、大きな川に変わっている。その川の中に、マンションが浮かんでいるように見える。
（まさか、あれが死の直前に見えるという、三途の川なのか）
そう思った時、息苦しさよりも切なさで胸が苦しくなった。それと同時に、初恋の女の子の顔や友達の顔、家族の顔が次々と浮かんできた。綾部の頬を一筋の涙が流れた。思わずそれを手で拭った後、彼は、はっとした。
（あっ、動かせる）

綾部は、両手を開いたり閉じたりしてみた。動く。彼は直ぐさま振り向いて野田を見た。すると、肩をぐるぐる回していた野田が、綾部の顔をじっと見て

「何、泣いてんだよ」

と言って首をひねった。綾部は慌てて涙を拭った。

「無い」

突然、誰かが叫んだ。体の自由を取り戻しほっとしていた住人たちは、鋭い視線を声の主に注いだ。視線の先には田中が居た。彼は口をあんぐりと開けたまま、窓の方を指さしている。住人たちはむっとしながらも、そちらの方に目をやった。

雨はもうすっかり上がっていた。なぜだか、夜明け前のようにうっすらと明るい。

「あっ」

今度は、田中以外の住人が一斉に叫んだ。

「立体駐車場が無いぞ」

A棟の西側には、幅7メートルの通路を挟んで、3階建ての立体駐車場が立っているはずだった。住人たちは、外へ飛び出した。その途端、肌を刺すような冷気が首筋を締め付けてきた。綾部は、警備服の襟を立てながら辺りを見回した。

そこには、立体駐車場はおろか、近代建築物と呼べるものは何一つ建っていない。そこに在るのは、石と砂の大地に、痩せ細った木が数本と草がまばらに生えているだけであった。

そして、マンションを挟むように、幅、100メートルほどの間隔で、川が南と北に流れていた。川幅は2本とも30メートルほどである。

「な、何ですかあれは」

南側の川向こうを見た綾部が、思わず声をあげた。そこには、無数の人間が整然と並んでいる。よく見ると、鎧のようなものを着て、手には槍や弓を待っている。

謎の軍団

「おい、こっちもだ」
野田にそう言われて皆、振り返って北の方を見た。そこにも同じように、大勢の鎧武者が川岸に並んでいる。
「あれを見て下さい」
そう言って、下里が枡型山を指差した。辺りはだいぶ明るくなってきて、遠くにある木々の青さまで分かるようになっている。
「あっ」
と言った後、綾部は絶句した。なぜなら、普段、マンションから見える枡型山は、山全体が樹木に覆われ、こんもりとした小山である。しかし、今、彼らが見ている枡型山は、木々など一本も生えておらず、山頂部分は、その名のとおり枡の形に削平されていた。
「あれは、山城ですね」
下里が、携帯電話を上着の胸ポケットから取り出しながら言った。
「あれで、城なんですか」
「はい、われわれが認識している、石垣に白壁の城は戦国時代後期の城なんです。戦国時代中期までは、土と木でできた簡素なものが殆どでした」
「ちょっと待って下さい先生。てことは、俺らは、戦国時代以前にタイムスリップしたってことですか」
普段、人を食ったような態度の野田も、さすがに戸惑っている。
「残念ながら、そのようですね」
そう言いながら、下里は携帯電話で枡型山を撮影している。興奮のためか、手が震えている。
綾部はまず、南側の軍勢に目をやった。そこには、最前列に槍をもった兵士が、横に隙間なく並んで5層の壁を造っている。数は200人ほどであろうか。その槍足軽のよう両翼に、弓をもった兵士と、彼らを敵の弓矢の攻撃から守る盾をもった兵士が、左右それぞ

れ５０人ほど並んでいた。
　そして、その後方、生田の丘陵の裾野の辺りに、騎馬武者とその従者の一群が居て、中腹に本陣が鎮座している。全体の総数は、ざっと７００人といったところか。また北の川岸に居る軍勢も、陣容はほぼ同じで、兵数が南側の軍勢より、若干多いように見えた。
「合戦に巻き込まれる可能性がありますね」
　下里が心配そうに言った。
「合戦?、という事は、彼らは敵同士なんですか」
「はい、その様ですね」
　そう言って、下里の講義が始まった。
「まず、南側にいる軍勢を見てください。山の中腹に本陣があります。そこに旗めいている大きな幟に、３つの三角形が書いてありますよね。あれは三つ鱗といって、北条氏の家紋なんです。ですから、恐らく彼らは、時代的に考えて後北条氏側の軍勢かと思われます。それから、北の軍勢の幟には」
　皆、一斉に振り返って北の方を見た。
「竹に雀の家紋が見えます。あれは上杉家共通の家紋といってもいい」
「という事は、上杉謙信ですか」
　綾部がそう言うと、皆の間から小さなどよめきが起こった。
「いえ、残念ながら違います。何故かというと、こう両軍を見渡してみても、槍と弓ばかりで鉄砲を持った兵士がいません。謙信が関東遠征を行っていた頃には鉄砲隊がありました」
「という事は、鉄砲が伝来する前の」
「はい、恐らく１５４０年代以前で、彼らは関東管領の上杉氏側の軍勢ではないかと」
　下里が話している間にも、馬のいななきや指揮官の号令が頻繁に聞こえてくるようになった。軍勢の緊張が一気に高まって、一触即発の雰囲気になってきた。
「もしかして我々は、パーティーの時、先生が話していた、多摩川

を挟んで北条と上杉が睨み合っていた時代に来たってことですか」
橘が、川向こうの動向を気にしながら聞いた。
「そのようですね。そして、ここは多摩川の中州だと思われます。確か、川崎市史によると、戦国時代の多摩川は、現在よりも南の小沢城や枡型城の麓を流れていたそうです。あれを見ると、文献とも一致しますね」
そう言って、枡型城を指差した。
「先生、俺たち、どうすればいいんですか」
綾部が、下里に縋りつくように質問した。彼の体は、寒さと恐怖で小刻みに震えていた。
「はい、そこで彼らに、我々は戦う意志のないことを伝えに行こうと思います」
そう言って、下里は皆の表情を伺った。皆、黙って下を向いた。無理からぬことである。武器を持っていきり立っている千人近い群衆の所へ、平然と交渉に行けるものなどそうそう居るものではない。
「しょうがねぇ、俺、北条の方に行きます、先生、上杉の方お願いします」
そう言って、野田は軽く足の屈伸運動を始めた。
「分かりました。そうですね、一人の方が、相手を刺激しないで済むかもしれませんね。あっ、それから大将、決して無理は禁物ですよ」
「大丈夫ですよ、こう見えても結構、臆病な性質でしてね」
そして、2人は、南と北に分かれて歩き出した。
バーン
2人が歩き出した直後に、銃声のような音が響き渡った。住人たちは、首を振りながら、南北どちらの陣営から銃声がしたのか確認しようとした。しかし、両陣営とも動揺している。兵列はゆがみ、幟が、風になびく草木のように揺れている。
鉄砲を発射した軍勢の兵士が動揺するはずがない。綾部は、南に佇む生田丘陵や北に広がる武蔵野の大平原を見渡した。しかし、そ

れらしき人や軍隊は見当たらない。
「あいつ等だ」

鏑矢合わせ

南側の陣に行こうとしていた野田が、マンションの方に向かって走り出した。他の住人たちも慌ててその後を追った。マンションの南側に来てみると、2階のベランダに3人の若者がいて空気銃を構えている。

「おい、吉田、何やってんだ」

野田が叫んだ。

バーン、バーン

吉田は構わず、空気銃を南側の軍勢に向かって乱射した。後輩の2人が奇声をあげて騒いだ。手にはワインやウイスキーの瓶を持っている。

この騒ぎでマンションの中にいた住人たちも、次々とベランダに顔を出した。

「おーい、カメラ何処だー。こっちこっち」

吉田が、南の陣に向かって空気銃を振っている。

「馬鹿、撮影じゃねーぞ、本物だぞ」

野田が吉田に忠告したが、事の深刻さが彼らにはなかなか伝わらない。ついには、吉田がボーガンを持って来て、南側の軍勢に狙いを定めた。

「それだけは止めろー」

今まで静かに事の成り行きを見守っていた下里が、突然、吠えるように叫んだ。

「どうしたんですか」

野田は、これほど感情を露わにした下里を見るのは初めてだった。

「申し訳ない。でもこの時代、矢合わせと言って、お互いに矢を射合って戦を始めるという風習があるんです。だから止めないと」

下里の早口の説明を聞きながら、住人たちはベランダの方に目をやった。吉田はもう、空に向かって発射しようとしていた。

「おい止めろ、危ない」
住人たちが、同じような事を口々に叫んだ。
「大丈夫だよ、この角度じゃ当たんねーよ」
吉田がニタニタ笑いながら答えた。
「馬鹿、向こうが危ないんじゃねー、こっちが危ないんだよ」
野田は、彼らの真下まで行って、説得を試みようとしている。その時、酔っていた上に、真っ青に晴れ渡った空を見て、遠近感が取れなくなった吉田は、前の方によろめいた。彼は、とっさに右足を前に出して踏ん張ったが、その時の弾みで、思わずボーガンの引き金を引いてしまった。
放たれた矢は、美しい放物線を描いて南側の陣へ飛び込んだ。その矢を、騎馬武者が槍で払いのけるのが見えた。さすがに不味いと思ったのか、吉田たちも、大人しく向こうの反応を覗っている。
すると、本陣から弓矢を持った騎馬武者が一騎、川岸まで駆け下りて来た。そして、おもむろに弓矢を構えると、空に向かって矢を放った。矢は、マンションの5階と屋上の間の壁に当たって、下里の足元に落ちてきた。彼は、矢尻がUの字になったその矢を拾い上げて
「答の矢ですね」
と言った。
「えっ、何ですか」
隣にいた綾部が聞き返した。
「これは答の矢と言って、こちらの挑戦を承ったという返事のようなものです」
「と言うことは」
「これから攻めて来るはずです」
住人たちが下里の説明を聞いていたその時、南側の陣から、槍を抱えた3人の騎馬武者が水しぶきを上げながら突進してきた。彼らがそれに気付いた時には、その距離、5，60メートルのところまで迫っていた。

「逃げろー」

住人たちは下里が叫ぶより早く、西面の玄関に向かって走り出していた。

「部屋に入ってー」

下里は、ベランダに出ている住人に向かって叫んだ。一番槍を競い合う3騎は、もう30メートルの所まで迫っている。下里と一緒に、その場に留っていた綾部と野田は、彼の腕を引っ張って玄関に向かって遮二無二走った。

その直後、騎馬武者たちの手から、長さ1間半（約2，5メートル）の槍が次々と放たれた。

専守防衛1

「うっ」
と言う呻き声が、走っている綾部たちにも聞こえてきた。その直後、南側の軍勢から
「うぉ〜」
と言う、低い地鳴りのような歓声が上がった。
放たれた3本の矢は、吉田たち3人を襲っていた。吉田は、崩れるようにその場に倒れた。彼は自分の身に、何が起こったのか直ぐには理解できなかった。しかし、その直後に襲ってきた足の激痛によって、それが何であるかを理解した。
無意識のうちに、痛みのする場所を手で押さえた彼は、そこから硬いものが突き出ているのに気付いた。はっとして見ると、手摺の柵の隙間をすり抜けてきた槍が、右太ももの内側に突き刺さっている。
驚いた彼は一瞬、そこから手を離したが、直ぐにその槍を激痛に耐えながら引き抜いた。太ももがジワリと温かくなり、ジーパンに赤黒い染みが広がった。起き上がろうとして顔をあげた吉田の目に、辺りを真っ赤に染めて倒れている、2人の後輩の姿が映った。
1人は槍を胸に受け、そんれを抱え込んだまま、壁を背もたれにして座った姿勢で息絶えている。もう一人は、ベランダからリビングに掛けて、くの字になって倒れている。槍が喉から項に掛けて突き抜けており、息が有るのか無いのか体のあちこちが痙攣している。
この悲劇を招いたのは、彼らが酩酊状態で逃げ遅れたからではなかった。この時代、合戦の前に矢合わせという風流な儀式がしばしば行われた。その際、矢を射るのはその軍の主将か弓の名手が行った。そのために吉田たちは、1番槍を競い合う騎馬武者に、それなりの身分のものと勘違いされ格好の標的となったのである。
3人の騎馬武者は、馬の背中から次々と吉田のいる2階のベラン

ダに飛び移り侵入して来た。そして、背中に刺した旗が天井に当たって邪魔なため、一旦それを抜いてベランダに立てかけた。吉田はその隙に、激痛に耐えながら這ってリビングから玄関に向かって逃げ出した。

侵入した兵士のうち2人は、自分の仕留めた獲物から槍を抜き取ると、脇差を抜いて、その首元に宛がった。そして、顔中に返り血を浴びながらも、それを全く気にすること無く作業に没頭した。

やがて切り離された首は、自陣に向かって高々と掲げられた。陣中から、大きな歓声が沸き起こった。

一方、功名争いで、二人に先を越されたもう一人の兵士は、自分の獲物に止めを刺すべく、腰に差した打刀を抜いてその背中を追った。

また、南側の軍勢には、本陣から総攻撃の命令が下された。まず、槍隊の左右に陣取っていた弓隊が、盾を前に押し立てて前進して来た。そして、川を渡りきった所で止まると、マンションめがけて矢の雨を降らせてきた。しかし、矢はことごとくコンクリートの壁や窓ガラスに跳ね返された。

それを見た指揮官は、一旦、弓を射るのを止めさせ、槍隊と騎馬隊に突撃を命じた。彼らを前へ前へと急き立てるように、太鼓と鐘がけたたましく鳴りだした。

玄関から、その様子を覗っていた綾部は、急いで玄関の扉を閉めて鍵をかけた。今、1階に残っているのは彼1人である。他の住人は皆、家族を守るため部屋に戻って行った。

彼は大急ぎで、エントランスの椅子やテーブルを玄関に運んだ。1階で一番侵入されやすいのは、恐らく玄関であろうと彼は考えた。玄関のガラスには、防火と防犯のためにすべて金網が入っている。しかし、扉の両脇もガラス張りのため、強度的には一番弱いと思われた。そこで、もし突破された際、少しでも侵入しずらくしようと思ったのだ。

また、エントランスも心配だった。ここには、縦1，5メートル、

横2メートルの窓が、西面と北面に3か所ずつ付いていた。一応、ガラスには防犯フィルムが貼ってあるが、果たしてこれが彼らの攻撃にどれほどの時間耐えうるのかは未知数であった。

兵士たちの怒声と、迫り来る地鳴りが大きくなってきた。鼓膜と足の裏が振動で震えた。綾部は、体のあちこちが、自分の意思ではコントロールできないほどガタガタと震えた。それでも綾部には、逃げ場が残されている分、吉田の置かれている状況と比べれば、まだましであった。

吉田は、騎馬武者が侵入すると、すぐさま這ってリビングから玄関の方に逃げた。廊下に出て、誰かに助けを求めようとしたのだ。しかし、直ぐに兵士が迫ってきたために、やもうえず、リビングと玄関の中間に位置するトイレに逃げ込んで内鍵をかけた。しかし、本当の恐怖はその時から始まった。

兵士はまず、打刀の柄で扉を叩いて強度を確かめた。そして、それを左の腰に収めると、右の腰に巻き付けてある巾着袋から、25センチほど小型の斧を取り出してトイレの扉を切りつけ始めた。

ドスン、ドスンという音がトイレの中に響く度に、便器に座った格好の吉田の体は痙攣を起こした。太ももに負った刺し傷の痛みなど、遠に忘れている。彼は扉が破られた時のために、何か自分の身を守るための縦になるものが無いか、広さ1畳、高さ200センチの空間を見渡した。しかし、適当なものは見当たらない。

その時、鈍い音がして斧の刃がトイレの中に侵入してきた。吉田は咄嗟に、足元に敷いてあるマットを拾い上げ盾の代わりにして身構えた。

兵士は斧を巾着袋に収めると、扉のちょうど真ん中あたりにできた、縦5センチほどの隙間からトイレの中の様子を窺った。そして、獲物の位置を確認すると、打刀を腰から抜いて、その穴に思いっきり突き通した。手応えを感じた兵士は、おもむろに打刀を引き抜き、その穴から、また中を覗き込んだ。兵士の瞳孔が開いた。仕留めたはずの獲物が、まだ、生きていたのだ。便器の後ろのタンクの上に、

穴の開いたマットを持って腰かけている。兵士は舌打ちをしたが、その後に、にやりと笑って打刀を腰に収めると、足早にベランダの方に向かった。

ベランダに戻ってみると、一番槍を競い合った他の二人はもう居ない。おそらく二人とも、首を持って本陣に手柄の報告に戻ったのであろう。もしかしたら、どちらが一番手柄かで揉めているかもしれない。そう思いながら、彼はベランダに落ちている自分の槍を拾い上げた。この槍ならば確実に仕留められる。

ちょうどその時、梯子がベランダに掛けられた。手摺から顔を出して下を見ると、兵士がぞろぞろと登って来る。彼は、獲物を他の奴らに渡すまいと、急いでトイレに引き返した。

戻ってみると、トイレの扉が開いている。慌てて中を見ると、もう、獲物はいない。彼は舌打ちをして、扉を蹴飛ばした。大きな音を立てて閉まった扉の向こうに、血の跡が点々と玄関の方へ続いている。槍を肩に立てかけ、兜の緒を締め直した兵士は、赤い血を道しるべに、獲物の後を追った。

専守防衛2

マンションの周りは、騎馬武者やその従者、そして、槍足軽たちでひしめき合っていた。ただ、北岸にいる敵の襲撃を警戒してか、北面のベランダから侵入しようとする者は誰一人いない。

また、マンションの西面と東面は、玄関を省けばほとんど開口部は無く、1階まわりも、すべての窓に防犯のために鉄柵が取り付けられており、侵入するのは困難であった。必然、彼らの侵入経路は、南面のベランダに集中した。

兵士たちは、まず梯子を使ったり、馬の背中から飛び移って2階に侵入して来た。幸い、2階の住人は総攻撃が始まった時、地上から近い分危険と判断し、誘い合わせて上の階に避難していた。彼らは、部屋を出る際、律儀にも玄関の鍵をかけて行ったのだが、それが良かった。なぜなら、部屋に侵入した兵士たちが、玄関ドアが開けられず、廊下に出ることができなかったのだ。そのお陰で、内と外の両方から攻められるという、最悪の事態は避けられた。

現代の我々は、サムターンを回せばドアは開くということを知っている。しかし、はじめて現代の扉を見た彼らにとって、その仕組みは、極めて難解なパズルのように思えたであろう。

一方、3階にも長梯子が次々と掛けられていった。梯子の長さは、3階までが限界のようである。したがって、住人たちにとっての防衛ラインは、この3階南側ベランダと言うことになる。

このA棟は、2階から5階までが居住空間で、各階に6戸ずつ入っていた。戸割りは、真ん中を通る廊下を挟んで、南と北に3戸ずつ配置されていた。建物の大きさは、東西25メートル、南北24メートル、高さは14メートルである。

現代では、この程度の大きさの建物など珍しくもないが、この時代の人々、特に坂東の片田舎の兵士にとっては、想像を絶するほど巨大な建物に見えたはずである。しかし、彼らは、そんな怪物に対

しても臆することなく、まるで、アリがケーキに群がるように、ぞろぞろとマンションを這い上がっていった。
３階の南側に住んでいる野田元は、両隣の住人、田中和也と草野勇治と協力して戦うことに決めた。相手が誰でであろうと、自分の縄張りを蹂躪されるのは男のプライドが許さなかった。
そこでまず、成人男子以外は皆、廊下に避難させた。それから、ベランダを仕切っているプラスティク製の防火壁を蹴り破り、自由に横移動ができるようにし、手摺には、弓矢を避けるために布団や毛布を掛けていった。また、木刀、傘、包丁、フライパンなど武器になりそうなものを持ってきて、彼らの襲撃に備えた。
「翔太君、大したもんだ。子供の頃の俺にそっくりだ」
野田に声を掛けられた草野翔太は、複雑な表情をしている。彼は、まだ１２歳の小学６年生であったが、自ら進んでここに残った。父親の勇治も、彼の勇気ある決断を尊重して共に闘うことを許した。
「田中、いい大人が何震えてんだ」
そう言って、野田が田中の尻をぴしゃりと叩いて気合を入れた。
「来ましたよ」
草野が、二人に声をかけた。津波のように人馬が押し寄せてくる。そして、その中から蛇が鎌首をもたげるように梯子が次々と立ち上がってきた。梯子の先端には、毒蛇の牙のように鎌が2本付いている。野田たちは、布団や毛布に身を隠し、敵の襲来を待ち構えた。
どん、どん、という鈍い音がして、次々とベランダに梯子が掛けられていく。野田たちは、鎌が手摺に食い付く前に横に滑らすように倒していった。
しかし、敵もさる者、下で梯子を抑える人数を増やしてきた。そうなると、もう梯子はびくともしない。２５メートル幅のベランダに、５本、６本と立ち始め、兵士が数珠つなぎになって登って来た。
野田が、刀を口にくわえて登って来た兵士の兜を、金属バットで思いっきり引っ叩いた。火花が散って、兵士は自分の下にいた兵士たちを巻き込みながら転げ落ちていった。

「くぅー、痺れるねー」
野田は、その手を癒す間もなく、隣の梯子を登って来た兵士を殴りつけた。田中は木刀、草野はフライパンを手に戦っていた。
翔太も父の隣で、ビニール傘を持って待ち構えていた。心臓の鼓動が、傘を持つ手にまで伝わってくる。そこへ、梯子を登って来た兵士が、手摺の上に顔を出した。髭面の兵士は、翔太を睨むと、いきなり唾を吐きかけてきた。
額に、ねっとりとした汚物が張り付いた。急に怒りが込み上げてきた翔太は、それを拭おうともせず、傘の先端を兵士めがけて力任せに突き出した。しかし、その渾身の一撃は紙一重でかわされ、逆に伸びきった左腕を掴まれてしまった。
兵士は、翔太の二の腕を掴んだまま、もう一方の右手でビニール傘を払い落すと、腰の脇差を抜いた。翔太は必死で逃げようともがいたが、兵士の上体の重みが左腕にかかっているため動くことができない。そこへ、脇差が、翔太の顔めがけて下から突き上げられてきた。
ボーン
翔太の二の腕から、兵士の手が離れた。翔太はベランダに、兵士は地面に転落した。倒れた彼が見上げた先に、フライパンを持った父の姿があった。間一髪だった。脇差が翔太の顔を貫く寸前、父のフライパンが兵士の頭をうち砕いていた。
「大丈夫か、無理するなよ」
勇治は、一瞬、父の顔を覗かせたが、直ぐに厳しい表情になり踵を返して正面を向いた。その時、「あっ」と言って勇治が顔を抑えて前屈みになった。流れ矢が米神を掠めたのだ。
その一瞬の隙に、登って来た兵士が手摺に片足を掛けた。そして、背負っていた刀を抜いて勇治に斬りかかって来た。
「お父さん、危ない」
翔太が叫んだ。
キーンという金属音が木霊した。兵士と勇治の間に、アルミ製の

物干し竿がぶら下がっている。
「よいしょー」
と言う掛け声とともに、その物干し竿が兵士の体を外へ押し出した。兵士はバランスを失い、真っ逆さまに転落していった。
「大丈夫ですか」
上の階から　声がした。草野がベランダから顔だけちょこんと出して上を見ると、物干し竿を持った下里がいた。そして、次々と他の住人も、物干し竿を持って顔を出した。
「草野と申します、ありがとうございます」
とだけ言って、直ぐに顔を引っ込めた。
「5階もいるぞー」
誰かが叫んだ。その直後、上からロープで結ばれた鉄アレイが落ちてきて、梯子を登る兵士の頭を直撃した。続けて今度は、紐の付いた中華鍋が落ちてきた。
「5階の皆さん、お手数掛けさせてすいませーん」
野田が嬉しそうに叫んだ。
こうして援軍を得た3階の住人たちは、次々と襲い来る敵の刃を、へとへとに成りながらも、何とか跳ね返し続ける事ができた。

一方、援軍もなく一人で恐怖に脅える男がいた。1階に残った兵士の群れ部である。玄関とエントランスには、もう、何百という兵士の群れが押し寄せていた。ガラスを見るのは初めてだった彼らは、そのまま突進して来て激突した。最初、ガラスを見るのは初めてだった彼らは、そのまま突進して来て激突した。しかし、直ぐに彼らも学習して、槍の石突や刀の柄で叩き始めた。

それでも、ヒビは入るが、なかなか割ることができない。そのうち、石を投げつけたり兜を脱いでそれで叩いたりし始めた。

必死で椅子やテーブルを運び続ける綾部を追って、兵士の群れが右へ左へと移動した。玄関の扉の前に椅子を置いて顔をあげると、目の前にいる兵士が血走った眼で彼を見ている。その兵士の足元には、味方の投げた石つぶてが当たったのであろう、男が一人、頭から血を流して倒れている。綾部はなるべく外を見ないようにして、椅子やテーブルを運び続けた。

しかし、5分と経たないうちに、ガラスは外の様子が見ずらくなるほど、ヒビだらけになってきた。石つぶてが当たったり、石突で突いたりする度に、防犯フィルムが貼られたエントランスのガラスは内側にへこみ、破られるのは時間の問題と思われた。

（もう限界だ）

そう思った綾部は、上の階に避難すべく、持っていた椅子を放り投げ奥の非常階段に向かって走り出した。

非常階段のドアを勢い良く開けると、暗闇の中から突然、下半身が血だらけの男が綾部の方に倒れてきた。綾部はその男を抱えたまま尻もちをついた。そして、気味が悪くなり、その男をはねのけて後ろへ飛び退いた。

「助けて、くれ」

血だらけの男がうつ伏せのまま、消え入るような声で言った。よく見ると、耳たぶのピアスや穴だらけのジーパンには見覚えがある。

綾部は、恐る恐る近ずいて行き、その男を抱き起こした。
「吉田！」
綾部は思わず、声をあげた。気を失っていた吉田が、その声に反応して薄目を開けた。そしてまた、消え入るような声で
「奴が、来る」と言った。
「誰が来るって」
綾部が聞き返した。すると突然、非常階段の鉄の扉が閉まる音が階段室の中に響き渡った。
(誰かいる、住人か)
そう思った綾部は、暗い階段室の中をじっと見つめた。すると、シーンと静まり返った闇の中から、コツ、コツと杖を突くような音と、カシャ、カシャと硬いものが擦れ合うような音が響いてきた。
(住人ではない)
そう直感した綾部は、逃げ込む場所を探した。真っ先に管理室が目に入った。
(できれば、あっちの方には行きたくないな)
次に、非常階段の向かいにある電気室が目に入った。確かに電気室は距離も近いし、扉は鉄製だから中に入って鍵を掛ければ安全だ。
(よし、ここに決めた)
綾部は早速、電気室の鍵を開けるため吉田を床に置こうとした。その時、今まで階段室に響いていた音が消えているのに気が付いた。
(何故だ)
と一瞬思い、階段室の方を見た。半開きの扉から差し込む弱い光によって、目の前の踊り場に槍を構えた鎧武者の姿が映し出されていた。その距離、わずか5メートル。当然、電気室の鍵を開ける暇などない。すぐさま綾部は、気を失っている吉田の両手をつかみ、引きずりながら後ろ向きになって走った。兵士がその後を、カシャカシャと鎧を揺さぶりながら迫って来る。しかし、その鎧が重いせいか、走る速度はそれはど速くはない。
距離を詰められながらも、なんとか管理室に逃げ込んだ綾部は、

すぐさま、ドアに鍵を掛けた。その直後、受付の窓ガラスが粉々に砕け散った。兵士が、槍の石突で叩き割ったのだ。しかも、兵士がそこから侵入しようと、上半身を管理室の中に突っ込んでいる。綾部は慌てて、兵士の野球帽のような形の筋兜と、黒糸縅の袖をつかんで、力任せに押し出した。

もんどりうって倒れた兵士は、直ぐに立ち上がった。そして、槍を肩に立てかけて、兜の緒を締めなおした後、両手に唾を吐きかけると槍を中段に構えた。綾部は、受付の横に置いてある道具入れの中から、長さ130センチの自在ぼうきを取り出して、2メートル50センチの槍に対抗しようとしていた。

その時、地響きとともに玄関のほうで何かが壊れるような音がした。その大きな音に驚いて、綾部が玄関の方に目をやると、玄関ドアの鉄枠が内側にくの字に曲がっている。ヒビだらけの網ガラスの向こうに、丸太を綱でぶら下げた大勢の人間が見えた。まるで巨大なムカデのようである。

彼らは助走をつけるため、えい、おう、えい、おう、と声を合せながら少しずつ玄関から離れて行った。

(玄関が破られるのも、時間の問題だな)

そう思った綾部は、急に足が震えだした。

(玄関が破られれば、管理室に雪崩込んで来た兵士たちに、執拗に切り刻まれるだろう)

激痛に苦しみながら死んでいく自分の姿が、頭をよぎった。

(今すぐ、仮眠室に逃げ込んで、自ら命を絶った方が楽なのかもしれない)

とさえ思っていた。

一方、兵士も焦っていた。なぜなら、ほかの二人に功名争いで先を越され、面目を失っていたからだ。それを挽回するには、是が非でも身分の高い武将の首がほしかった。そして、2度仕留め損なったものの、鏑矢を射た身分の高い男をこの部屋の中に追い込んだのだ。邪魔ものが雪崩れ込んでくる前に、是が非でもその首を挙げた

かった。
そのためにはまず、目の前のこの男を始末しなければならない。
そこで彼は一計を案じ、槍を長めに持って狙いを定めて突き出した。
綾部は自在ぼうきを持ったまま、槍の届かない所まで退いた。戦うより、この方が安全である。しかしそれは兵士の思う壺であった。綾部が後ろへ退いた隙に、また受付から侵入しようと上半身を突っ込んできた。
綾部はそれを阻止するため、自在ぼうきを放り投げ、慌てて兵士の所え駆け寄った。しかし、それもまた兵士の計略であった。侵入する振りをして、受付に腹ばいになっていた兵士は、素早く身を引いて立ち上がった。そして、受付に置いていた槍を素早く手元に引き寄せると、近付いてきた綾部の腹部めがけて突き出した。
綾部はくの字になって槍を抱え込んだ。痛みに耐える彼の耳に、閧の声が聞こえてきた。薄目を開けると、それまで静観していた北側の軍政が押し寄せてくるのが、前屈みになった兵士の肩越しに見えた。
(もうこれで、何もかもお終いだ)
と彼は思った。北の軍勢も、獲物を横取りするために攻めに出たのであろう。インパラを仕留めた雌ライオンたちの周りを、包囲するように徘徊するハイエナの群れ、という弱肉強食の映像が綾部の脳裏をよぎった。
兵士が槍を抜いた瞬間、綾部はその場に崩れ落ちた。それを見た兵士は、ゆっくりと受付から侵入してきて、うずくまっている綾部を、軽々と持ち上げてひっくり返し、その上に馬乗りになった。
その時、玄関の方で何かが爆発した。受付に背を向ける格好の兵士は、一瞬、動きを止めたが、直ぐに気を取り直し、左手で綾部の顔を床に押し付けた。綾部も、腹部の痛みをこらえて必死で抵抗したが、鎧を着た兵士は事のほか重く、押しのけることはおろか自分の体を動かすことすらできない。
そんな彼に、唯一、残された道は、両手を無茶苦茶に振り回すこ

とだけであった。しかし、それすらも、鉄と革でできた鎧にいとも簡単に跳ね返された。
　兵士は、綾部のささやかな抵抗をうっとうしいと思ったのか、アイアンクロウのように、綾部の顔に爪を立てた。あまりの痛さに綾部は、兵士のその手を両手でつかんで、顔から引き離そうとした。兵士は、綾部のささやかな抵抗がやんだその隙に、腰から右手で脇差を素早く抜いて、無防備になった綾部の喉元に押し当てた。
　綾部の喉元に、生温かい液体が流れた。何故か、彼の顔を鷲掴みにしていた兵士の手が緩んだ。すぐさま、その手を払いのけた綾部の上に、兵士がどさりと倒れてきた。驚いた綾部は覆いかぶさった兵士の下から、体を引き抜くようにして上体を起こした。
　綾部の腹部に、顔をうずめている兵士の項から血が湧き出している。生温かい液体は、この兵士の物だった。彼は、咄嗟に、自分の首を手で触ってみたが、切り傷はどこにも無い。思い出したように、腹部も触ってみた。先ほどまでの痛みは嘘のように消えている。兵士の頭をずらして見てみると、布ベルトのバックルに穴が開いている。しかし、貫通はしていない。
　綾部は生れて初めて、うれしくて泣きそうになった。つい先ほどまで、死の恐怖に脅えていた男がである。この感覚は、生と死が乖離した現代社会では、到底、味わうことのできない鮮烈さであった。
　しかし受付を見たとたん、彼の歓喜は吹き飛んでしまう。そこには、体を斜にして槍を構えている兵士が立っていた。しかも、エントランスには、もう、１０数人の兵士が侵入している。
(この男が殺ったのか)
　とすれば、この男、命の恩人ということになる。しかし以前、下里から、この時代は手柄を横取りするために、味方でも平気で殺害した、という話を聞いたことがあった。それを思い出した綾部は、自分の膝の上で息絶えている兵士を押しのけて、奥の仮眠室へ走って逃げた。管理室の入り口で、気を失っている吉田のことなど、もう、どうでもよかった。

専守防衛4

一方、上の階では、3階の住人を中心として、総力戦の様相を呈してきていた。4階と5階の住人が援護射撃を開始した直後に、2階から逃げてきた住人が3階の廊下に避難していた女性たちから事情を聞き、援軍に加わった。その後3階の北側の住人も、北側からは攻めて来ないとわかると、援軍に加わってきた。

これで、3階で戦う男の数は12人になった。それに対して、3階のベランダに掛っている梯子は8本。そこで、1本の梯子に1人付いて、余った4人は遊軍として自由に動けるようにした。

しかし、兵力の差は歴然としていた。マンション側の総兵力はわずかに25人。それに対して、攻め手は総兵力700人で、そのうち、本陣の兵を省いた500人が戦闘に参加している。

戦闘開始からまだ10分しかたっていなかったが、普段の運動不足も手伝って、住人たちは徐々に息が上がってきた。そこへ草野の妻、富子が飛び込んできた。

「北にいた人たちも、攻めて来ましたよ」

「人数はどの位だ」

夫の勇治が聞いた。

「南の人たちの2倍はいます」

富子の言うことは、事実とは違っていた。実際に攻めてきたのは700人で、2倍というのは大袈裟であった。しかし、恐怖に駆られた富子の目には、それ位の大群が攻めて来たように見えたのである。

「おーい、北の軍隊も攻めて来たぞー」

上の階からもヒステリックな声が響いてきた。現状でも完全にオーバーワークなのに、これ以上仕事が増えたら完全にパンクしてしまう。彼らは、仕事を放り出して、何処かへ逃げ出したい衝動に駆られていた。しかし逃げ出す場所などない事は、誰しも分かってい

た。
「大将、大将居ますか」
４階から下里の声がした。
「何ですか先生、い、忙しいんで、手短にお願いします」
「分かりました。屋上出入り口の鍵、有りますか」
「屋上？」
「はい、非常階段を使って屋上に出れますよね」
「あぁ、持ってます持ってます」
「良かった。それで屋上に避難しましょう」
「屋上ですか」
「はい、上杉軍が攻めてきた今、兵士の侵入を防ぐのは不可能です。ですから、屋上に避難しようと思うんです。屋上のドアに鍵を掛ければ、彼らの侵入を防ぐことができます」
確かに下里が言うように、屋上に出る非常階段のドアは、内と外の両方とも鍵で施錠する物であった。理由は、防犯のためとも、自殺を防止するためとも言われている。そのため、その鍵は、管理人と警備員とマンションの理事しか持っていなかった。野田は、このマンションの理事であるから鍵を持っていた。
この屋上出入り口の扉は鉄でできているため、鍵を掛ければ兵士の侵入を防ぐことができる
「で、でも、その後どうするんですかー」
田中が珍しく大きな声を出した。
「その後は、何とか助けてもらえるように彼らと交渉するんです」
「たけど先生、はぁはぁ、こ、こんな状況で、上手く非難できるかどうか」
野田が心配するのも無理はなかった。新手の兵士を相手に、疲労困憊の彼らが、子供や老人を連れて屋上へ逃げ切ることができるだろうか。
「それに、非常階段の中に兵士がいたら、どうするんですか」
草野が言う事も、尤もであった。２階には何の障害も無いため、

かなりの兵士が侵入していた。その兵士たちが部屋を出て、非常階段に入り込んでいる可能性は十分に考えられた。
「それは大丈夫です。今、４階の女性たちが確認しましたから。ただ、早くしないと入ってくる可能性があります」
「それで、鍵はどうするんですか」
「私の妻が、もう直ぐそちらへ行きますので渡して下さい」
下里が話し終わらぬうちに、真理が野田のいる所へ走って来た。
「ちょっと待ってね、真理ちゃん」
野田は持ち場を遊軍の住人に変わってもらい、鍵をキーホルダーから外して真理に手渡した。
「真理ちゃん、内の爺さん、足手まといだったら置いてっていいから。後で俺が負ぶっていくから」
「大丈夫ですよ、皆さんに協力してもらって、もう4，5階当たりを登ってますよ」
「あぁ、それは有難い」
「それじゃそろそろ私、行きますね」
真理はそう言った後
「みなさん、もう少しの間、頑張って下さい」
と戦っている男たちに声を掛けてから去って行った。
「先生、渡しました」
野田が下里に声を掛けた。
「分かりました。それではそのままで、私の話を聞いて下さい」
そう言って下里は、ベランダにいる住人全員に聞こえるように大声で説明を始めた。
「まず、女性たちが避難し終わったら、3階の皆さんが先に避難してください。しばらくの間、４階と5階の人間で兵士の侵入を防ぎます。その後で、４，５階が一斉に非難します。いいですか」
「いいです」
「先生ありがとうございます」
誰かが下里にお礼を言った。皆も同じ気持ちであった。逃げ場も

無く、絶望していた彼らに下里の提案は生きる希望を与えてくれたのだ。

「避難、完了でーす」

　屋上から真理の声が聞こえて来た。

「じゃぁ、３階の皆さん避難してください。エレベーター側の階段ですよ」

　下里の声を合図に、３階の男たちは武器を待ったまま一斉に走り出した。４，５階の住人たちは、必死で兵士の侵入を食い止めようとした。しかし、それも１０秒と持たなかった。兵士たちは、物干し竿や鉄アレイの攻撃をかいくぐって、次から次へと部屋の中に侵入して行った。それを見て、この辺が潮時と見た下里が、残った４，５階の住人に撤収命令を下した。

　３階の住人が屋上に達した頃、４，５階の住人が非常階段に入って来た。嬉しい事に、女性たちが各、踊り場にいて、懐中電灯で階段を照らしてくれていた。これが無ければ、真っ暗な非常階段を迅速に登ることは難しかったであろう。この女性たちの協力もあり、全員無事、屋上に避難することができた。

鍵を掛けた後、住人たちの中から拍手が起こった。とりあえず、これで兵士の侵入を防ぐことができる。窒息するような緊張感から解放された綾部は、思わず空を見上げて深呼吸をした。
真っ青に晴れ渡った空、肌を刺すような冷たい冬の空気、それらは現代の物と何ら変わりはない。しかし、地上に目を移すと、現代の日本では、まず遭遇することのない修羅場が繰り広げられている。
南側からは時折、弓矢が飛んでくる。その矢には威力は無く、当たったとしても切り傷を負う程度であった。しかし、念のため、子供と老人は屋上の真ん中に設置してある、大きさ1，5メートルのサイコロ型の貯水タンクの北側に避難させた。
屋上には、この貯水タンクと東面中央にエレベーター機械室と非常階段の塔屋があった。
「全員無事、避難できて良かったですね」
草野が、ほっとした表情で言った。
「いや、綾部君がいません」
綾部と親しかった田中が、唇を震わせながら呟いた。
「大丈夫だよ田中、あいつ臆病だから真っ先に電気室にでも逃げ込んでるよ」
そう言って、田中を慰めた野田であったあ、内心、最悪の事態を覚悟していた。
「だけど、彼は何で上の階に逃げて来なかったんですかね」
誰かのその問いには、誰も答える者はいなかった。しばらく続いた沈黙の後、野田が話を切り出した。
「先生、ちょっといいですか」
彼は下里を連れて北側に行った。そして、屋上の周りに設置されている、高さ1メートルの手摺の所まで来ると、飛んでくる弓矢を気にしながら地上を指差した。

「北側の連中、上杉でしたっけ、彼らは何で、この面から登って来ないんですか。梯子が無いんですか」
「そうですね、見た感じだと、北条勢を追い払ってから、マンションの攻略に取り掛るんじゃないですか」
そう言って、今度は下里が野田を連れて南側へ移動した。橘や田中など、数人の住人が２人の後を付いてきた。
「見て下さい。梯子を登っている兵士がいませんよね。これは、戦いがマンションから地上に移ったということです」
下里が指差した地上を見ると、両軍の兵士が戦いを繰り広げている。そのため、先程まで時折、飛んで来た弓矢も今はすったり止んでいる。
両軍入り乱れて戦っているため、野田たちには北条と上杉の区別がつかない。当然、どちらが優勢なのかも分からない。
「もう少ししたら、北条勢は総崩れになるかもしれませんよ」
「どうして、そんなことが分かるんですか、先生」
野田の質問に、下里は両手を前に出して、大きな木を抱え込むような格好をした。
「こうやって、兵士たちが戦っている範囲を囲ってみて下さい」
その場にいた男たちは、下里の言うとおりにしてみた。すると、兵士たちが戦っている場所が、手で作った輪の中からはみ出して、南の方にずれて行くのが分かる。つまり、北から攻めて来た上杉勢が優勢なのだ。やがて、下里の予想は的中した。戦いが始まって僅か２０分足らずで北条勢は総崩れとなり、南の丘陵地帯へ逃げ出した。その後を、上杉勢の一部が追って行く。北条勢にとっては、これからが本当の修羅場となるであろう。それを象徴するように、丘陵の中腹に陣取っていた本陣の兵も、幟や陣幕を残したまま、算を乱して枡形山城目指して逃げて行く。
残った上杉勢は、ぐるりとマンションを取り囲んだ。少なくとも５００人はいるであろう。中には石を持っているものや、弓を引いて狙いを定めている者もいる。

住人たちはとりあえず、貯水タンクの所に避難した。しかし、今度は四方を取り囲まれているため、何処から飛んでくるか分からない。多くの親と同じように、橘縁も陽菜の上に覆い被さって子供を守ろうとしていた。

しかし、いつまで経っても石つぶてや弓矢は飛んで来ない。その時、突然、開くはずの無い非常階段のドアが開いた。そして、中から鎧武者が次々と現れた。

住人たちは悲鳴をあげ、貯水タンクの西側の影に隠れた。もう彼らに、逃げ込む場所は無い。

「何で開くんですか。鍵、間違いなく掛けたよね」

「鍵を持ってたとか」

「なんで、あっ、もしかして管理人から奪ったとか」

「てことは、管理人は、やっぱり駄目だったって事か」

住人たちの話を黙って聞いていた田中の顔が、青から赤に変わった。仲のいい綾部の死を、あたかも近所のペットが死んだ時のように、軽々しく扱われたことに腹が立ったのである。

出て来た兵士は全部で8人、中には兜も被らず草摺りも付いていない、ライフジャケットのような鎧を付けた軽装の兵士もいる。狭い非常階段を登って来たせいか、槍を持っている兵士は一人は居ない、おそらく持っている武器は刀だけであろう。

「くそぉ、戦いましょう。このままじゃ」

「田中君、落ち着いて下さい」

珍しく下里が、語気を強めて田中を諫めた。

「いや、先生、こっちは向こうの3倍だ。持っている武器も刀だけだし、何とか成るかもしれませんよ」

野田が言うように、こちらの戦闘員、つまり成人男子は25人で、数では勝っていた。

「我々に、素手で戦えって言うんですか」

即座に、4階の住人からクレームが付いた。彼らも向こうの兵士と同様、逃げる時に邪魔になるという理由で、武器の物干し竿を持

って来なかった。これでは、頭数では3倍でも、戦力的には3倍には程遠い。
「大将、取り敢えず私が交渉してみます。もし、ダメだったら」
「俺も、お供しますよ、先生」
「いや、1人の方が向こうも警戒しないでしょう」
そう言うと下里は、中腰の姿勢から立ち上がって歩き出した。
「あれ、綾部君」
田中が呟いた。
「何言ってんだ田中、落ち着け」
野田が、語気を荒げて諌めた。
「あれは、綾部君じゃないですか」
歩き出していた下里も、田中と同じことを言って立ち止まった。
「何言ってんですか先生まで、悔しいけど綾部はもう居ないんですよ」
「居ますよ、ほら」
そう言って、田中が兵士たちのいる非常階段の方を指差した。野田が貯水タンクの影から身を乗り出して覗くと、ドアの前でたむろしている兵士の前を、ゆっくりと懐中電灯を片手に警備服の男が歩いてくる。少しやつれた様にも見えるが、その低い背丈に浅黒いサル顔は紛れもなく綾部であった。
「どうも、お久しぶりです」
首に付いた血の塊を指で掻き落としながら、綾部は白い歯を見せて笑った。住人たちも、貯水タンクの影から彼の周りに集まって来た。
「血だらけだけど、怪我したんじゃ」
田中が目を潤ませながら聞いた。
「大丈夫、これは返り血だから」
「と言うことは、戦ったんですか」
「まぁ、そうですね。でも最後は、彼らに助けて貰ったんですけどね」

そう言って、兵士の方を指差した。
綾部は、仮眠室に逃げ込んだ後、なかなか兵士が攻め込んで来ないので、襖を開けて管理室を覗いてみた。すると、数人の兵士が吉田を介抱している。それを見て、恐る恐る仮眠室を出て兵士に話しかけてみると、住人を助けよ、という命令が出ているとの事。それを聞いて安堵した彼は、今の状況を兵士に聞いてみた。すると、住人たちは屋上に逃げているという。そこで、早速、兵士たちと伴に屋上へ彼らを迎えに来たのである。
「みなさん、もう大丈夫です。私たちを襲って来た北条は、彼らによって駆逐されました。安心して下さい、彼らは、私たちの味方です」
綾部がそう言うと、住人たちは歓声を上げた。中には泣き出す女性もいた。
「彼らは、やはり上杉の兵ですか」
気付かれないように、携帯電話で兵士たちを撮影した後、下里が聞いた。
「はい、上杉修理大夫と言う方の家臣で、難波田弾正忠と言う方の軍勢だそうです」
下里が何度も頷いた。
「先生、ご存知ですか」
「えぇ、面識はありませんが」
と下里が冗談ぽく言うと、住人たちの間から一斉に笑いが起きた。その笑いが収まるのを待ってから、彼はさらに続けた。
「上杉修理大夫朝興、関東管領の上杉家から分かれた、扇谷上杉家の当主です。難波田弾正忠は、そこの重臣ですね」
「はぁ〜」
住人たちの間から、下里の博識に感嘆の声が上がった。
「じゃぁ、取り敢えず皆さん、中に入りましょう。エントランスで、難波田様の家臣の藤堂様が待ってらっしゃいますから」
綾部にそう言われて、住人たちはマンションの中に入って行った。

８人の兵士は、そのまま屋上に残り見張りの任務に就いた。

会談1

　エントランスの中央に、住人代表と上杉方の武将、藤堂佐内が、丸いローテーブルを挟んで向かい合って座っていた。
　住人代表のメンバーは、野田元、下里秀康、草野勇治、綾部正悟である。他の住人は、エントランスに散らばっている椅子やテーブルに腰掛けて、交渉の行く末を固唾をのんで見守っている。
　外は、すっかり戦の前の静寂を取り戻していた。
　本陣はまだ川の向こうに鎮座していたが、５００人の兵士たちが整然と並んでマンションの四方を固めている。その近くでは人側たちが、せっせと穴を掘っていた。穴のすぐ傍には、ラクダのこぶのように、掘り出した土の山とその穴にに埋める死体の山が並んでいる。
　藤堂は、前建ての無い質素な兜を脱いで膝の上に置いた。
　露わになったその顔は、頭頂部をそった月代以外は現代の我々と何ら変わりはない。輪郭は細面、顔は鼻筋が通り目は程よく切れ長で精悍な印象を与えた。年の頃は３０歳前後であろうか。
「拙者、難波田憲重が家中で、武者頭の藤堂佐内と申す」
　そう言って会釈をした彼の声は、戦のためか元からなのか少し枯れていた。
「えーと、我々は皆この建物の住人で、私はここの理事をやっております、野田元と申します」
　珍しく緊張気味の野田元に続いて、他の３人の代表も挨拶をした。その度に、藤堂は丁寧に会釈を返した。その恭しい振る舞いを見て、住人たちは一様に胸を撫で下ろした。
「さぁ、これからは腹を割って話をしたいと思うが、如何かな」
　そう言って、後ろに立っている兵士に兜を預けた。
　彼の後ろには、従者らしき兵士が２人と、槍を待った護衛の兵士が３人立っている。護衛の兵士は、穂先が天井に当たらないように

わるまで1階に入って来ないように言い渡してあった。

勿論、住人たちも、腹を割って話すことに異論はなかった。

「所で各々方、何処から来られた。それと、この石の城どうやって一晩で造られた」

彼は洋服が珍しいのか、目の前にいる野田をじろじろ見ながら質問した。

住人代表の3人は一様に下里を見た。周りで見ていた住人たちの視線も、彼に注がれている。やはり、このような時に上手く説明してくれるのは、下里しかいないと誰もが思った。

住人たちの期待を一身に背負った彼は、気負うことなく、少しだけ身を乗り出して答え始めた。

「私、下里と申します。まず、何処から来たかという事ですが、それは未来です」

余にも直接的な説明に、綾部は、彼らが理解できるかどうか心配であった。

「みらい、とは、明国の近くか、それとも天竺辺りか」

藤堂は、首を捻りながらも目は下里を見据えている。

「いえ、500年先の日本です」

そう言って下里も、藤堂の目を見据えた。

「貴様、我らを愚弄する気か」

突然、後ろに控えていた従者の1人が刀の柄に手を掛けた。住人たちの中から小さな悲鳴が上がり、綾部は思わず中腰になった。その時、藤堂が手を横に出して彼の動きを制した。従者は、しぶしぶ抜きかけた刀を鞘におさめ、憮然とした面持ちで腕組みをした。

「下里殿、先程、腹を割ってとは申したが、戯言は困る」

藤堂はまだ、冷静さを保っている。

「戯言ではありません。我々にも、如何してこうなったのかは分かりませんが」

そこまで言ったところで下里は、綾部から懐中電灯を受け取って

藤堂に見せながら
「分かって貰えるかどうか分かりませんが、これがその証拠の１つです」
そう言うと、懐中電灯を天井に向けてスイッチを入れた。
日が昇り、外は明るくなっていたが建物の中は少し薄暗かった。
そこに、光の柱が立った。
「これは懐中電灯と言って、５００年後の行燈のような物です」
「触っても大丈夫か」
藤堂は、光の柱を指差した。後ろに立っている従者や護衛の兵士も、住人たちの方に目を光らせながらも、ちらちらと懐中電灯の方を気にしている。
「大丈夫です、この通り」
そう言って下里は、光に手をかざして見せた。それを見た藤堂は、恐る恐る手をかざしてみた。そして安全だと分かると、懐中電灯を手にとって瞬きもせずにライトの中を見つめている。
下里は畳み掛けるように、上着の胸ポケットから携帯電話を取り出して藤堂に見せた。
「これは携帯電話と言って、遠くの人と話ができる機械です」
藤堂は、懐中電灯をテーブルの上に置くと、それを受け取りながら
「遠くとは、１里（約３００メートル）位か、それとも１０里でも大丈夫なのか」
と下里に聞いた。
「はい、１０里でも大丈夫ですよ。異国の人とも話ができます」
「明や天竺でもか」
「はい」
藤堂の前にいる４人が、一斉に頷いた。他の住人たちは、藤堂の驚いた表情を見て、お互いに顔を見合せながら笑っている。
「どうすれば話せるのか」
この未知の道具を持て余した彼は、首を捻りながら、それを下里に手渡した。ただ、懐中電灯を見た時よりは、遥かに目が輝いてい

る。実は、密かにこれを戦に利用できないかと考えていた。
下里は、二つ折りになった携帯電話を開き、藤堂に見せながら説明を始めた。
「携帯電話には、１つ１つに番号が付いています」
野田や綾部も、自分の携帯電話を取り出した。
「我々は、これをほぼ１人１台持っています」
「子供でもか」
「いえ、さすがに子供は全員とはいきませんが、１６歳以上では、ほぼ全員と言っていいでしょう」
今度は、周りで見ていた住人たちも、それぞれ携帯電話を取り出して藤堂に見せた。その行動には、この会談が、少しでも良い方向に進んでほしいとの願いが込められていた。
彼らの気持ちが通じたのか、藤堂は、住人たちに向かって一礼した。そして、正面に向き直って、説明の続きを促すように下里の目を見つめた。それを受けて下里も、住人たちに会釈をした後、携帯電話のプッシュボタンを指差しながら話を続けた。
「話が途中になりましたが、先程話しました携帯電話1台1台に割り当てられた番号を、このボタンで打ち込むんですね、そうすると、その打ち込んだ番号の携帯電話に繋がります。そしてお互いに話ができるようになります」
下里は、まるで子供に話しかけるように、懇切丁寧に説明した。
「実際にやってみてくれぬか」
藤堂が身を乗り出してきた。
「いや実は、この時代では使えないんです」
下里が申し訳なさそうに言うと、先程まで生き生きとしていた彼の顔は急に曇り始めた。
「何故じゃ」
期待を裏切られたためか、それとも疑っているのか語気が荒くなっている。話し合いが始まってからの短い間にも、彼の表情は極端に変化した。それは、最初に見せた恭しい態度の裏に、自分ではコ

ントロールできない程の、激しい気性が潜んでいる証であった。
下里は、携帯電話の通じる仕組みを噛み砕いて説明したが、藤堂の表情が晴れることはなかった。それを見た野田が、話題を変える意味で逆に藤堂に質問した。
「所で今、何年の何月何日なんですか」
「享禄3年（1530年）1月7日でござるが」
藤堂は、憮然として答えた。
「北条家の当主は今、誰ですか」
野田のその質問を聞いて、藤堂の表情がより一層厳しくなった。
彼は、怒りを含んだ眼差しで虚空を睨むと、僅かに震える唇から絞り出すような声で話し始めた。
「北条とは笑止千万。氏綱めは、朝興様が納める国を盗んだ上に、それを正当化するため得手勝手に北条を名乗っておる。盗人猛々しいとはこの事よ」
彼の言っている事は、あながち間違いではなかった。後北条氏は元々、伊勢という姓であった。下克上の象徴とされる北条早雲の存命中の名は、伊勢宗瑞である。
2代目の氏綱も当初は伊勢を名乗っていたが、大永3年（1523年）頃に北条に改姓している。理由は、藤堂が主張するように、相模の国の支配権を正当化するため、鎌倉時代の相模国の守護で執権の北条氏の威光を借りたものと言われている。
「その伊勢氏綱は、どの辺りまで侵略して来ているんですか」
下里は、藤堂を刺激しないように、慎重に言葉を選びながら質問した。藤堂は怒りを抑え、ここ数年の状況を話してくれた。
それによると、上杉方は、何とか多摩川で伊勢氏綱の北進を食い止めようとしたが、味方の裏切りなどもあり、残念ながら江戸を始め多摩川の北側を取られてしまった。
しかし、ここ数年は、修理大夫様の獅子奮迅の活躍もあり、多摩川中流域の世田谷郷から駒井郷では、彼らを駆逐することに成功した。駒井郷での事は、先程、お主らが見ていた通りである、という

事であった。
「所でお主ら、先の時代から来たと言っておったが、ならば、これから先の我らの行く末も知っておるであろう」
藤堂の表情は相変わらず厳しい。
「いえ、歴史については、そのー、恥ずかしながら余り詳しくないもんですから」
歴史学者の下里が、咄嗟にごまかした。正直に、北条が関東の覇者になる、などと言える雰囲気ではなかった。
「他の者はどうじゃ」
そう言いながら、彼は前にいる綾部たちを睨みつけた。もう、最初に対面した時の、恭しさは微塵も感じられなかった。

会談2

「きゃー」
その時、住人の間から悲鳴が上がった。その声に驚いている綾部の横を、２階から下りて来た人足の男が１人、裸の人間を負ぶって外へ運び出そうとしていた。良く見ると、背負われている人間には首が付いておらず、その切り口からは血が滴り落ちている。
藤堂が首を振って、何やら後ろの従者の１人に合図を送った。それを受けて従者は、大股で歩き出し、小柄な人足の前に立ちふさがった。
年の頃は４０代半ば位であろうが、顔中、髭だらけで小熊のような人足は、従者の怒気に満ちた表情を見ると、急に震えだし、何度も頭を下げた。
しかし、従者の男は表情を変えることなく、刀の柄に手を掛けて、頭を下げ続ける人足の首めがけて切り上げた。
「待ってくれ」
野田が、立ち上がって叫んだ。
刀は人足の首に食いこむ寸前で止まった。
藤堂は腕組みをして、椅子の背もたれに寄り掛かるようにして野田を見上げた。
「これ位で殺すこと無いだろう、藤堂さん」
野田は興奮のあまり、普段、仲間と話す時のような口調になっている。
「軍法に背いたのじゃ、致し方なかろう」
藤堂の口調にも遠慮はない。
「軍法つったって、急きょ決めた事だろう。一生懸命仕事してて、知らなかったかもしれねぇじゃねぇか」
「しかし、お主らも面白いのう」
「何っ」

「先程まで、散々、人をなぶり殺しにしておきながら、いまさら何を言っておるのだ」
矛盾を突き付けられた野田が、返す言葉を見つけられないでいると
「あれとこれとは事情が違います」
横から下里が、助け船を出した。
「どう違うのじゃ」
「あれは専守防衛です」
「どういう意味じゃ」
「それは、攻撃を受けた時のみ、自分たちを守るために戦うという事です。決して、こちらから攻撃する事はありません」
藤堂が腕を組んだまま、ふん、と鼻で笑った。
「成るほど、言葉だけ聞いておると立派に聞こえるが、実際、そういう考え方が受け入れられるとは思えんがのう」
「・・・」
「たとえば、己たちより遥かに大きな敵に攻められた時、他の勢力に合力（協力）を求めねばなるまい。現にお主らは、我々の助勢を受けたお陰で助かったであろう。その合力してもらった相手に、今度、合力を求められた時、お主らが言う、なんと言ったか」
「専守防衛です」
「そう、それが為に合力はできぬ、と申すつもりか」
「・・・」
「そんな都合のよい話が通るわけ無かろう。もしそのような手前勝手な態度をとり続ければ、やがては孤立して滅び去るは必定。それでもお主ら、その存念通せるか」
さすがの下里も、返す言葉を失った。野田は立ったまま、拳を固く握りしめている。
沈黙の中、人足の首に刀を当てていた従者が、おもむろにをれを引き抜き、自らの頭上に振り上げた。
人足は思わず、背負っていた死人をその場に落とし自分もそこえへたり込んだ。そして、観念したのか両手を摺り合せながら、何や

ら、ぶつぶつと念仏のようなものを唱え始めた。
その時、馬のひずめの音が聞こえて来た。そして、その音が止んだかと思うと、すぐさま砂利をかむ軽快な足音が響いてきた。
「注進、申し上げます」
使番（伝令）が、粉々に壊れて、ぽっかりと口を開けた玄関の前で片膝を付いている。今まさに、目の前で人が切られようとしているにも拘らず、少し下を向いた姿勢で微動だにしない。
それを見た住人たちは
（この時代の人々は、人が殺される事など何とも思っていない）
一様に、そう感じていた。
また、それと同時に、この時代に迷い込んだ自分たちの命も、そこに居る人足同様、粗略に扱われる事を想像して暗い心持になった。
「おい黒崎、もう良い。邪魔だ、放り出せ」
藤堂が、吐き捨てるように言った。
黒崎なる従者は、振り上げていた刀を下して、死体とともに人足を外へ追い出しにかかった。人足は、急き立てられているにも拘らず、住人たちに手を合わせて深々と頭を下げた。そして、死体を引きずって出て行った。
「何じゃ、申せ」
「はっ、申し上げます。川向こうに軍勢が現れました。数は、ざっと３００」
藤堂が、使い番に注進を促した。
「小沢城の兵じゃな。まあ、本気では攻めて来ないであろうが、一応、鶴翼の陣を敷いておけ。ただし、いたずらに相手の挑発に乗るなと伝えい」
「はっ。それから、枡形勢を追って行った者どもも呼び戻しますか」
「捨て置け。追撃したと言えば聞こえは良いが、実際には、向かいの村に物取りや人取りに行っただけの事。奴らがどうなろうが、知った事ではないわい」
「はっ」

「以上である」
「はっ、しからば御免」
そう言って、使番はマンションを出て馬に飛び乗った。
藤堂が、腕組みを解いて両手を膝の上に置いた。それから、熱を持った頭を冷やすかのように、大きな深呼吸をした。そして、住人たちをぐるりと見渡した後
「先程は少し言いすぎた様じゃ、許されよ」
そう言って頭を下げた。
それを見た住人たちの間に、一瞬、笑みがこぼれたが、直ぐにまた不安な顔に戻った。また戦になるのか、誰もが十数分前に体験した恐怖を思い出していた。
そこで藤堂は、住人たちに、マンションから安全な場所に避難することを勧めた。当然、彼らもその提案を受け入れた。

住人たちは急いで部屋に戻って、避難の準備に取り掛かった。ただ、かなりの物が、乱入した北条方の兵士はもちろん、助けに来た上杉方の兵たちによって持ち去られていた。そのため、残った僅かな物の中から、着る物と、レトルトや菓子などの食料を中心に荷造りをした。

「何を愚図ってんだ」

5階の橘家では、荷造りが済んで部屋を出ようとしたが、陽菜が泣いている。

「絵が無いのよ」

縁があちこちを、ひっくり返している。

「何の絵だよ」

聡が面倒臭そうに頭を掻いた。

「二子玉に家を探しに行ったでしょう」

「あぁ」

「あの時、多摩川の河原でお弁当食べたでしょう。あの時の事を書いた絵があるのよ」

「思い出した、兵庫島だろう」

彼らは3か月前まで、会社の社宅に住んでいた。ある日、聡が、宴会係の主任にも昇進したたし、そろそろ自分たちの城が持ちたいと言い出した。

それを聞いた縁は、もう少しお金を貯めて、それを頭金に東京の郊外に一戸建てをと思っていたが、言い出したら聞かない性質なのでしぶしぶマンションを買うことを了解した。

機嫌を良くした聡が、お前の好きな所でいいぞ、と言ってくれたので、兼ねてからの憧れの地、二子玉川で物件を探すことにした。

しかし、いざ探してみると、さすがに人気の街だけあって値段が高い。彼らの希望する、値段と間取りの物件がなかなか見つからな

い。
　疲れ果ててたどり着いたのが、多摩川の河川敷にある兵庫島公園である。
　そこで３人は、遅い昼食をとった。陽菜はその時の事が甚だ楽しかったらしく、その事を絵に描いて後生大事に持っていたのだが、この時の混乱で何処かへ行ってしまったのだ。
「有った、有った」
　縁がそれをベランダから見つけて来て陽菜に見せた。陽菜がようやく泣きやんだ。
　その後、二子玉川をあきらめた2人は、値段も手頃で、聡の勤務先の新宿にも電車１本で行けるという事で、登戸のこのマンションに決めたのである。
　再度エントランスに集まった住人たちは、亡くなった2人の若者のために黙とうを捧げた。亡骸は、後で玄関のわきに埋めてくれるように藤堂に頼んであった。
　本来ならば、自分たちの手で埋めてやるべきであった。しかし、一刻も早か避難したかった事と、普段から、彼らの事を快く思っていない住人が少なからずいることを考慮して、そうするしかなかった。
　仮眠室に寝かされていた吉田が、綾部と野田の肩を借りて管理室から出て来た。
「いい身分だな」
「あんたのせいで皆、危ない目に遭ったんだぞ」
　住人たちの中から罵声が飛んだ。吉田はまだ、意識がもうろうとしていて無反応である。
　野田が、罵声を飛ばした住人をなだめてから、吉田を、管理室に置いてあった担架に乗せた。
　黒崎を先頭に、３０人の兵士に守られて、住人たちはマンションを後にした。
　彼らは、取り敢えず和泉村の泉龍寺に身を寄せることになった。

この寺は、現在でも、小田急線、狛江駅の近くにあって、ベッドタウンとして急速に発展する狛江市に貴重な緑を提供していた。

住人たちも泉龍寺の事はよく知っていて、あれだけ立派な寺なら安心できると手を叩いて喜んだ。また、定住先については、この戦がひと段落したら藤堂が探してくれるとの事であった。

南の対岸では、小沢城の兵たちが、石を投げたり野次を飛ばしたりして、挑発を繰り返している。しかし、上杉軍は微動だにしない。ただ、何時攻められても対応できるように、緊張感だけは保っていた。

「先生、玄関の壊れ方がひどいですね。人間の力だけであんな風に成りますか」

陽菜を抱いた橘が、後ろを振り向きながら言った。陽菜は丸めた画用紙を握りしめて眠っている。

「周りが黒く焦げているでしょう、もしかしたら、焙烙玉が使われたのかもしれませんね」

「焙烙玉？」

橘が聞き返した。

「はい、陶器などで造った半球形の容器を二つ貼り合せて、それに火薬を詰めたもので、直径20センチ位の爆弾のような物です」

「へぇ～、この時代にもそんな物が有ったんですか」

「はい、記録上は安土桃山時代辺りからなんですが、もしかしたら一部の忍者などが、すでにこの時代に使用していた可能性はありますね」

「なるほどね」

住人たちは北側の川に差しかかった。流れが中州で二分された上に冬枯れのため、現代の多摩川よりは遥かに小さな流れである。それでも藤堂は、住人たちのために急造で橋を掛けてくれた。

住人たちは、藤堂の色々な計らいに感謝していた。感情の起伏が激しいのは玉に傷だが、根は悪い人ではないという、ある種の信頼感のようなものが芽生えていた。

杭に繋いだ緒牙船に、弓矢避けの盾を載せただけの不安定な橋を、住人たちは恐る恐る渡って行った。
狭い河原には数件の小屋が建っていた。朽ち果てた板を張り合わせただけの貧疎な物で、中の様子が板の隙間から見え隠れしている。
「ここ登戸だろう、何にもねーな」
この地で生れ育った野田が、唖然としている。河原の前に広がる台地には、人の背丈ほどもあるススキ以外は何も目に入って来ない。僅かに、彼らのいる場所から東に200メートルの所に上杉軍の本陣の幟が見えるだけである。
そのすすき野に埋もれそうな狭い道を、兵士と住人たちは一列になって進んだ。しばらく歩いていると、突然すすき野は終わり民家が現れた。
農家と思われるその建物は、縦、横とも5メートルはどの大きさで、当然平屋である。壁は土壁で、屋根には板が載せてあり、風で飛ばないように重し代わりに人の頭ほどの石がいくつも乗せてあった。人気は無いようである。
「多摩川で戦があったから、みんな村の避難所に逃げているんですよ」
と下里が教えてくれた。
だんだん家や畑が増えて来た。その頃になると、住人たちも精神的に余裕が出て来たらしく、盛んに携帯電話で戦国時代の風景を撮っている。
それにしても小さい。家も畑も人も、何もかもが小さいのだ。藤堂や黒崎も、骨太で威風堂々としているが、立つと子供のように小さかった。正味、155センチ位ではないだろうか。
一行は坂を下って、平坦な場所に出た。しばらく行くと道端に50センチほどの石碑が建っている。そこには駒井郷、和泉村と彫ってあった。現在の、狛江市元和泉である。反対側には、駒井郷、登戸村と彫ってある。
そこを過ぎると、また登り坂になった。

「先生、もしかして、ここは川の跡じゃないですか」
田中が、後ろ向きに歩きながら今来た低地の方を指差した。良く見ると、其処にはまるで龍が通った後のような巨大な窪みが、うねりながら東西に横たわっている。
「田中君、正解ですね。しかもここは、先程の村境の石碑でも分かるように、現代の多摩川とほぼ同じ川筋ですね」
先導する兵士たちを追い越して、下里が、坂の上から川筋を見渡した。
住人たちは皆、坂を登りきった所で一旦止まって、マンションの方を見た。
現代ならば、他のビルが邪魔になって、この場所からは見えるはずがなかった。しかし今は、レンガ風の茶色のマンションが周りの緑に溶け込んで、不思議と違和感なく建っているのが見えた。
「これで見納めかもしれないわね」
橘縁が涙ぐんだ。
「良いじゃないか、これから親子3人、安心して暮らせる場所に行くんだから」
橘聡はそう言って、腕の中で眠っている陽菜を抱きしめた。
「そうね、特にこの子には、これから先長い人生が待っているんだもんね」
緑も聡に抱きつくようにして、娘に頬ずりをした。
一行は、農村から雑木林の中に入った。そして、暫くして泉龍寺に着いた。その間、一人の村人も見かける事は無かった。

多摩川の攻防

一方、多摩川では本陣が動き出していた。
黒鹿毛の木曽馬に跨った、鉢巻き姿の難波田憲重を中心に３００の兵が川を渡って中州に上陸した。
それに押し出されるように、鶴翼の陣を敷いていた５００の兵が、南の川を渡って小沢勢に襲いかかった。
しかし数では劣勢でも地の利は小沢勢にあった。上杉勢が動き出すと同時に、彼らはするすると後方の谷戸に逃げ込んで、山の中に消えて行った。
散々に野次られ罵られた上杉の兵士たちは、ため込んだうっ憤を晴らすべく、と言うよりは、勝ち戦の戦利品に与ろうと、喜び勇んで敵の背中を追いかけて行った。
「引けーっ、そこまでじゃ、引けーっ」
突然、中州で指揮を執っていた藤堂が、異変にきずいて撤収命令を出した。
その異変とは、谷戸の谷間に逃げ込んだ小沢の兵が、そこから小沢城に連なる尾根に登って来ないのだ。小沢城に逃げ込むにはこの道が一番近いはずである。
もしや、谷戸の両脇の山に潜んで、侵入して来た我が軍を挟み討ちにする気なのか。
もしここで、小競り合いとは言え負けるような事があれば、最初の勝ち戦が台無しになる、そう思った藤堂は、即座に撤収命令を出したのだ。
使い番からもその命令を伝え聞いた物頭たちは、声をからして兵士たちの突進を引きとめようとした。
物頭とは、百名から、大軍になると千名以上の兵を束ねる指揮官の事である。この軍では、千名足らずの小部隊であるから百人の長と言う事になる。

その彼らが、どんなに大声で叫んでも、一度火が付いた欲望を、完全に消し去るのは容易ではなかった。兵士の中には、物頭の命令を無視して追撃を続ける者が続出した。
その時、物頭の一人が馬を飛ばして兵士たちを追い越し、軍勢の先頭に躍り出た。そして、手綱を引いて反転すると、刀を抜いて逆走し始めた。
血しぶきと共に、先頭集団を形成していた足軽たちの首が次々と飛んだ。十人ほど切った所で兵の動きが完全に止まった。
呆気に取られて見ていた他の物頭たちが、思い出したように、また撤収を叫び始めた。
この一人の男の行動は後に、僅かの犠牲で軍全体の敗北を救ったとして、軍の上層部から末端の兵士に至るまで、すべての人々に称賛された。
撤収が完了して、小沢の兵も去った後、上杉軍は本陣をマンションの中に移した。
「細貝盛直、そちの機転、なかなか見事であったぞ」
エントランスでは、難波田が、敗北の危機から軍を救った物頭と対面していた。難波田の後ろには藤堂が立っている。
「はっ、恐悦至極に存じます。ただ、足軽たちには可哀そうな事をしました」
椅子に座っている難波田に対して、２５歳の青年将校は片膝をついて床を見つめている。
「なんのなんの、お主のお陰で、その何倍もの命が救われたのじゃ、気にするでない」
「はっ、情け深いお言葉、盛直、心が少し軽くなりました」
「うんうん、誠に殊勝な心がけじゃ。佐内、お主、良い家臣を持ったのう」
実はこの細貝と言う男、藤堂家の家中の者であった。
また、藤堂家と難波田家は、寄り親・寄り子の主従関係にあった。
「盛直よ、これからも佐内を助け、上杉家のために励んでくれよ」

そう言って、一握りの砂金を和紙に包んで手渡した。
細貝が去った後、今度は、多摩川北岸の村々の名主が入って来た。鎧を着たままの彼らは、難波田の前に横一列に並んで土下座した。
「面を上げよ」
藤堂のその声を合図に、彼らは床からゆっくりと顔を剥がした。
「今日のそちたちの目覚ましい槍働き、上様に変わって礼を言うぞ」
難波田にそう言われて、軽く会釈をした彼らの前に、砂金の入った巾着袋が一つずつ勘定方の兵士によって置かれた。細貝が貰った量の5倍はある。
「所で一つ、頼みがある」
難波田が、両手を両ひざに乗せて身を乗り出して来た。名主たちは、お互いに顔を見合わせた。
「いや、大した事ではない。この城の周りに柵を造りたいのじゃ」
そう言って彼は、ちらっと斜め後ろに居る藤堂の方を見た。すると、藤堂が一歩前に出て口を開いた。
「人夫は十貫につき一人、それ以上であればなお良し。それから、村の貫高については新たな指出しはまだ故、昔の指出しを参考にさせてもらった」
それを聞いて、名主たちが色めき立った。
この時代、城普請や軍役などの人数は、村や郷の貫高（米や麦などの石高をお金に換算したもの）に応じて割り当てられていた。
城普請の相場は、当時、２０貫につき1人である。相場の2倍の要求に名主たちが驚くのも無理はなかった。
「何時までに集めれば」
名主の一人が恐る恐る聞いた。
「期限は明日の明け六つ（日の出）まで、急を要すること故よろしく頼む」
そう言って、藤堂が頭を下げた。
厳しい条件ではあったが、名主たちは彼らの要求を受け入れた。何故なら、今が1年で一番食料が乏しくなる時期だからだ。

もし、城普請に出れば、食料と手当が支給され、その間、百姓たちは家族を飢えから守ることができる。
また、名主たちにとっても都合が良かった。
もし、この要求が農繁期であれば、野良仕事に手が回らなくなった百姓たちが、荒れた田畑を手放して集団で欠落ちする事態にもなりかねない。
しかし今は、米はもちろん冬麦も作付が終わり農閑期に入っている。軍役にしても普請役にしてもこの時期ならば問題ない。
早速、名主たちは段取りをつけるためマンションを後にした。
「志村様、少しお待ちを」
兵士の一人が駒井郷の名主、志村久兵衛を呼びとめた。そして、もう一度エントランスの中に連れ戻した。

エントランスには、藤堂一人が座っていた。
志村が床に座ろうとすると、藤堂が椅子を指差した。指示されたとおり、白髪の混じる初老の男は、藤堂の前に置いてある椅子に腰かけた。
「どうじゃ、南蛮の椅子の座り心地は」
藤堂が、にやりと笑った。
「南蛮ですか」
「そうじゃ、向こうではのう、このような家に住み、このような椅子に座って暮らしておるそうな」
そう言いながら、藤堂がぐるりと辺りを見回すと、志村も、つられたように首を回した。
「はぁ～、大したもんだ。だけんど、南蛮人っても、妙な着物を着てる他は私らと大して違いやせんね」
「言葉も通じるしなぁ」
「へぇ～」
「まぁ、南蛮人も色々よ。それより志村、同じ武蔵野の草を食んで育った者同士、ざっくばらんに話をしたいがどうだ」
「へぇ、そりゃもう」
ここで藤堂が少し小声になった。
「駒井は今まで吉良に年貢を納めておったろう。世田谷城が我らの手に落ちた今、お主、どうするつもりだ。まだ奴らに義理立てする気か。それとも半手か」
半手とは、国境になった村や郷が、両方の勢力に年貢を半分ずつ収めることである。
駒井郷はそれまで、吉良頼康に年貢を納めていた。吉良家は当時、現在の横浜市から世田谷区にまたがる、広大な領地を有していた足利一門の名家である。

当主の頼康は、久良岐郡（現、横浜市）に居城をかまえ北条氏綱と同盟関係にあった。

そこへ、上杉朝興が旧領を奪還すべく挙兵し、まず手始めに、吉良氏重臣の大平氏が守る世田谷城に攻めよせてこれを落としたのだ。

さらに、駒井郷の目の前に突如現れたこのマンションも、たった今、上杉軍によって占拠された。つまり、駒井郷は完全に上杉朝興の勢力圏に入ったのだ。

「どうするのだ」

再度、返答を求められた志村は、僅かな唸り声を洩らして下を向いた。

「おめぇ、吉良に何分持って行かれてんだ」

藤堂は、駒井郷が吉良頼康に収めている年貢の割合を聞いた。

「えーと、五分でございます」

「苦しかろう」

「へぇ、そりゃもう、毎年、今の時期には死人が出やす」

「上杉様にお味方すれば、向こう三年、年貢は免除だ」

「えっ」

「嘘じゃねぇ、これは、今、世田谷に居られる上様、直々のお達しだ」

この条件に、志村の心は忠義と私欲の狭間で揺れ動いた。正直、郷民の苦衷など眼中に無かった。

「実はな、この話、お主の郷だけの事なのだ。他の郷には、年貢は二部と言う話をこれから持って行こうと思っているのだ」

「なんでまた、内だけなんです」

志村の顔が赤みを帯びて来た。

「南蛮人から譲り受けたこの石の城を守るには、隣接する駒井の合力が是非とも必要なのだ」

そう言って藤堂が、志村の右手を両手で握りしめた。志村は驚き恐縮して、より一層顔を赤らめた。

「それと、合力を約束してくれるなら、上様から格別の褒美が下さ

れる事になっておる」
「格別の褒美？」
そう言って、志村が頭を上げた。
目が合うと、藤堂がにやりと笑った。

「おい、これが泉龍寺か」
　期待を抱いて泉龍寺に避難して来た住民たちであった。
しかし、目の前に現れたのは、朽ち果てた生け垣に囲まれたみすぼらしい観音堂が一つだけの廃寺であった。
　ここが現代のような立派な構えになるのは、江戸時代になってからの事である。
「沙汰があるまでここで待つように。それから、危険なのでここから絶対に出ないように」
と黒崎に言われ、仕方なく住人たちは生け垣の中に入った。
　現代の泉龍寺は、数々の豪奢な建物が千坪以上の敷地に建っている。それと比べると、今の泉龍寺は見る影もなかった。
敷地は正方形で、面積は５０坪ほどである。茅葺き屋根の観音堂は４坪ほどの広さで、敷地の奥にひっそりと佇んでいる。
　それでも戦場に居るよりは、遥かにましであった。住人たちは荷物をおろして、それに腰かけたり、阿弥陀堂の狭い縁側に座ったりして寛いだ。
　毛布に包まれた吉田も、木漏れ日の当たる南の縁側に担架と伴に寝かされた。
「寒くないか」
　野田が吉田に声を掛けた。声を掛けられた吉田は、壁の方を向いたまま小さく頷いた。
「しかし、困りましたね」
　そう言いながら、下里が辺りを見回した。彼が心配してるのは寝床の確保である。
　観音堂の扉には鍵がかかっており、中に入る事が出来ない。このままだと皆、野宿になってしまう。昼間でもこの寒さである、夜の事を考えると、せめて体力のない吉田や子供や老人だけでもお堂の

中で休ませたい。
「この寺を管理してるのは和泉村か」
野田が煙草に火をつけながら言った。それを見て数人の住人が、思い出したように煙草を取り出した。
「黒崎さんに聞いてみたら」
「そうだな、走って行けば追いつくかもしれないな」
そこで、綾部と田中が選ばれて黒崎の後を追った。
寺を飛び出してすぐに、兵士が先頭を走る綾部の前に立ちふさがった。先程まで住人たちを護衛して来た兵士である。
「ちょうど良かった。黒崎さんに聞きたい事が有るんですけど」
綾部がそう言うと
「寺から出てはならぬと言われたはずだが」
兵士が刀の柄に手を掛けながら、威圧するような口調で言った。
「急用なんです、黒崎さんに取り次いで下さい」
田中が手を合わせて懇願した。
「ならぬ、藤堂様より、如何なる理由があっても寺から出さぬように、とのお達しなのじゃ。さっさと戻れ」
兵士にどやされた綾部と田中は、すごすごと今来た道を引き返した。
寺へ戻る途中、綾部が周りを見渡すと、あちこちの木陰から人の目が光っているのが見えた。
「あの藤堂と言う男、敵か味方か、どっちなんだよ」
野田がそう言いながら首を捻った。
「無秩序なこの時代、これだけの人数を守るには、それ位の厳しい規律が必要なのよ」
住人たちの多くが、まだ藤堂の事を信頼しているようだ。
「おい、こら」
突然、雑木林に怒鳴り声が響いた。
住人たちが声のした方を一斉に見ると、そこには４人の行商人らしき男女と、２人の兵士が立っている。行商人たちが寺に入ろうと

した所を、兵士に咎められているようである。
４０歳前後の頭と思しき男が、烏帽子を握りしめて兵士に向かって必死に頭を下げている。その後ろでは、まだ幼さの残る少年２人と、涼しげな眼もとをした２０歳ぐらいの女が１人、片膝をついてかしずいている。
しばらくして、頭が懐から何かを取り出して、兵士の一人に渡そうとした。その兵士がそれを拒否すると、もう一人の兵士がそれを受け取った。そして、拒否した兵士をなだめながら、その場を立ち去った。
解放された行商人たちが、軽快な足取りで寺の中へ入って来た。４人は、連雀という箱を背負っている。
頭が、手下の３人を入り口付近で待たせて、愛想笑いを浮かべながら住人たちに近ずいて来た。この時代の人間にしては背が高い、１７０センチほどはあろうか。
身なりはと言うと、鈴懸けに結袈裟を付けて、その上に袖の無い毛皮を着て切る。手には１メートルほどの杖を持ち、頭には烏帽子を乗せている。
中世の行商人には、山伏姿を真似た者が多かったというが、彼もその類の１人であろう。
「お取り込み中すいやせん。チョイと、隅っこを貸して頂けないでしょうか」
頭は、そう言いながら烏帽子を取って頭を下げた。どうやら休憩をしたいらしい。
「どうぞどうぞ、好きな所を」
野田が両手を広げた。
それを見て頭は深々と頭を下げた。そして、振り返って
「おい」
と言って、持っていた杖で、入り口付近で待っていた手下に敷地の隅の方に行くように指示をした。彼らは、指示された場所に移動すると背中の連雀をおろして座り込んだ。

「くらっ、挨拶しねぇか、このがきゃ」
頭に一括された3人は、座ったままでぺこりと頭を下げた。
「へへへ、どうもすいやせん、愛想のねぇ奴らでして」
そう言って頭は、3人の分まで肩代わりするかのように、何度も何度も頭を下げた。
「失礼ですが、何を売り歩いてらっしゃるんですか」
下里は、手にボールペンとメモ帳を持っている。
「へい、あっしら何でも屋でして、油や塩を問丸から買って売り歩く事もありやすし、百姓から草履や蓑や竹細工を買って、それを売り歩く事もありやす」
「今日は何を」
「へい、今日は塩を得意先に卸して来た帰りなんです」
そう言って、背中の箱をゆすって見せた。すると、箱の中で枡が転がって、カラカラとなった。
「ところで皆さんは、どういうお方で」
頭が恐る恐る聞いた。
そこに居た住人たちは顔を見合わせた。彼に正直に話した所で、理解できるかは疑問である。
「どうも、その変ったなり、いえっ、すいやせん」
そう言った後、頭が気まずそうに項を掻いた。
「良いんですよ、この洋服でしょう。これは南蛮の者なんです。私たちは日本人なんですが、南蛮の近くにある種子島と言う所から来たんです」
下里にしては、大胆なほらである。生真面目な彼に、こういう一面があったとは、野田や綾部も気付かなかった。
「勝っちゃん、遊びに来てくれたのか」
突然、巌がとぼとぼと歩いて来た。
頭が驚いて、巌の顔をまじまじと見ている。
「どうした勝っちゃん。おらの事忘れたか、巌だよ」
そう言って、巌が頭に近ずいて手を握ろうとした時、野田元が間

に割って入った。
「申し訳ない。この爺さん、ちょっとボケてるもんで」
そう言って強引に祖父の手を引いて、和子のもとへ巌を連れて行った。
「すいやせん、とんだ長居をしやした。先を急ぎますんであっしらこれで」
頭は急用を思い出したのか、落ち着かない様子でその場を離れた。そして、３人の手下を急き立てるようにして寺を出て行った。
これから、じっくりと話を聞こうと思っていた下里は、少しがっかりしていた。
長年、歴史研究に携わって来た彼は、生きた資料を前にして、密かに意気込んでいたのかが、巌の乱入で逃げられてしまったのだ。
(まぁ、焦る事は無い。取材の機会は、これから幾らでもある)
下里は、そう自分に言い聞かせて気持ちを切り替えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9656s/

マンション戦記

2011年9月6日03時28分発行